

地域合同世話人会&

幹事会〈4/10〉ご報告

新学年が始まり、新たな気持ちと同じ、爽やかな晴天の日に、例年は3月に行われる幹事会と、4月の地域合同世話人会が同日に開催されました。

事前に各地域より2~3名までのご出席を…とお願いをしたことで参加者を約100名に抑え、密を避けた状態でお座りいただくことができました。

第一部の幹事会では、代表挨拶から始まり、地域の活動を支えて下さる新窓口、幹事、世話人の皆さまに活動報告と2021年度の方針案をお伝えし、ご承認いただきました。



加藤佳世
父母代表

第二部の世話人会では、春の新生歓迎地域懇談会の開催の仕方や地域活動の運営方法の説明に続いて、杉浦先生からは父母懇活動へのご協力に対する感謝と、私学助成運動の到達点、及び東海中高父母懇総会や県父母懇総会のご案内がありました。そして北村先生は、窓口となる幹事の皆さまが負担を背負い過ぎないように、事務局の地域担当や担当教員に遠慮なく相談をして、コロナ禍で持続可能な活動を展開していただきたいと話されました。

第三部、堀口陽平先生(高校英語科)の「大学入試「改革」をふり返る」の講演では、東海目線で具体的な例をあげ、わかりやすくご説明いただきました。安易な改革案により振り回された受験生や先生方のご苦勞、入試改革の難しさがよく理解できました。

講演の中で、「本当に大切なものは何か? 我々大人が育てたいのは『試験に受かる人』なのか、『能力を磨いた人』なのか?」という言葉にドキッとさせられ

ました。勉強の真意をまだ見出すことのできない我が子に、とりあえず勉強することだけを強要してしまっている気がしたからです。今の

入試制度では、なかなか「能力を磨いた人」を選ぶことは難しいかもしれません。しかし、東海には現実に即した学びのサタプロや記念祭、学問的な本質に迫って学ぶアカデミックキャンプやクラブ活動など、真正の学びの場がたくさんあり、素晴らしい学校に通っていることを再確認いたしました。多くの刺激を受けて、我が子もいつか目覚めるきっかけを見つけてくれるといいな、と思います。

父母懇行事の中には、先生、OB、OB父母や講師の方々をお招きして、講演を聴いたり、質問をしたりもできる機会がたくさんあります。不安を解消・共有でき、自分自身の視野も広がると思います。子ども達と一緒に、私達も楽しい学校生活を送りませんか。

【参加者の感想】

- ・ 他地域の皆さまが活動なさっていることが実感できる、良い機会となりました。自分たちの地域での活動に活かしていきたいと思います。先生方のお話も大変興味深く伺いました。
- ・ 地域における東海父母懇の必要性を感じました。コロナ禍で通常のように開催していくのは難しいので、状況を見ながら工夫をして実施していければと思います。
- ・ 堀口先生のお話は私自身が経験した大学受験より大分変わっていたことが分かり、大変勉強になりました。

次ページはアンケートでも好評だった堀口先生の講演ダイジェストです。



講堂の様子

第三部、堀口先生は 36 枚のスライドを使い、入試“改革”の本質を鋭く問う内容を、今春卒業生の入試結果も踏まえながら講演してくださいました。以下に内容を報告させていただきます。

堀口陽平先生

～大学入試「改革」を

東海目線でふり返る～

タイトルにカギかっかがついているのは、本当は“改革”ではない、ということ。本日は入試「改革」を東海目線でふり返りたい。

今年の入試は、コロナ禍もあってか、旧担任クラスの卒業生たちは、国立前期で苦戦した。



本来は祝福の場であるはずの卒業式で、生徒に対して「あきらめずにやろう」と奮起を促した結果、狭き門の後期でクラスの6名が合格した。「粘り勝ち」があると、生徒の頑張りを見て痛感した。

共通テストの全国結果は、昨年・一昨年のセンター試験と比べると、8割(720点)以上が取りにくい試験だった一方、7割の平均点前後に集中し差がつきにくかった。共通テストは間に合わせの勉強では厳しいと感じた。以前は高3の1年だけでフルスロットルで間に合わせる展開もあり得たが、高1・高2からある程度基礎力養成を始めておく必要がある。ただし、高1のはじめから本格的な受験勉強をやる必要はない。不安に駆られて焦っているのは最後まで持たない。よい形で高3の受験勉強につなげるための基礎が、学校の授業と試験だと思っている。

昨年度の受験生は、共通テスト以外にも制度が二転三転し翻弄された。英語民間検定試験、共通テスト記述式、JAPAN e-ポートフォリオ(生徒に高校生活の足跡を入力させて入試の判断材料にするシステム)に加えてコロナ。これら全てが、今までは見えにくかった「問題」を浮き彫りにしたのではないか。「改革」を目指せば目指すほど、改革にならない事態が生じ、「そもそも論」が覆い隠された。文科省には政策検討をきちんとしてほしい。 (中略)

一方、批判一辺倒ではなくどうすればよいかを提言したい。我々大人が育てたいのは、「試験に受かる子」なのか、それとも「能力を高めた子」なのか。本当に生徒のためになるのはどういうものなのか。試験には必然的に虚構性が伴う。リアリティーを追求するならもっとリアルな場が必要だと思うし、一方、数学など抽象的思考が求められるものは、とことん抽象論を突き詰めればよい。生徒は敏感で、このような「虚構」や「茶番」を見抜く健全な感覚を持っている。茶番の対極は authenticity(本物であること、真正性)。現実に即して、あるいは学問的な本質に迫って学ぶことが、本来のあり方だと思う。

東海を振り返ると、サタプロ、記念祭、クラブなど足元に「現実に即して学ぶ」機会があることに気づく。一方で、学問的本質に迫るものとしても、アカデミックキャンプや各種学問系クラブなどの活動がある。サタプロにおいては、生徒自身が専門家と直接コンタクトをとり、どういう視点からお客さんの心をつかむかを考えることは現実に即した学びの例だ。オンラインで実施した昨年の記念祭では、著作権についての検討を始めたのは生徒だったし、英語版の作曲ソフトを使うべく自分でなんとか英文を解読した生徒もいた。海外研修や外国人授業も、実際のコミュニケーションの経験を大切にしようとしていると思う。クラブ活動でも、努めて本物に触れさせることは、生徒のモチベーションにつながると思っている。また、科学系のオリンピックについても、学校で意欲的に取り組んでいた生徒がその学問に目覚めて特色入試で大学に入っていくという姿が見られた。



東海には、自分の興味関心をとことん追求する生徒がいるので、そういうところを伸ばしてあげたい。受験勉強を軽視しているわけではなく、それをもとにして興味を広げていく方向性を考えたい。ともすれば、お仕着せになってしまいがちなアクティブラーニングではなく、興味を持った生徒同士で教え合うピアでの学習という方向性のほうが、ひょっとすると東海生らしいのかもしれない。東海生活をふり返って語る卒業生のことばを聞くと、日常生活の

なかで「学びに向かう」きっかけをつかんだ生徒もいる。東海生の底力を信じて後押ししたい。今回の入試「改革」をふり返ると、考えれば考えるほど、大事なことが逆説的に映し出されたと思う。生徒の可能性を矮小化しないで、今後も後押ししていきたいという気持ちを新たにした。（終）

新入生歓迎フェスティバル前夜祭

&パレード〈4/18〉

新入生歓迎フェスティバル前夜祭が、名古屋商工会議所及び白川公園付近で開催されました。このイベントは、毎年GWに行われる新入生歓迎フェスティバルに向けて、学校の垣根を越えて新入生を迎える機運を盛り上げるために行われるもので、東海からも25名の生徒さんが参加しました。



午前中に開催された高校生議会(各学校の代表によるプレゼン大会)では、東海から参加したメンバーが壇上にずらりと整列。群舞練習など新歓フェスに向けて取り組んでいる姿を発表してくれました。各学校が個性あふれるパフォーマンスを見せてくれましたが、なかでも東海のメンバーは勢いと熱を感じさせ、存在感が際立っていました。



午後からは、白川公園でステージ発表・希望プロジェクトが披露されました。新たな

群舞の「笑ってたいんだ」では、アップテンポの曲に合わせ、多くの高校生が練習してきたダンスをエネルギッシュに踊りました。また、合唱「花は咲く」は、振り付けのみのバージョンで、印象的なメロディーが会場を包み込みました。

締めくくりのパレードでは、メンバーが手作りした横断幕を持ちながら、先生・父母と一緒に栄周辺を歩きました。時折、小雨が降りしきり、冷たい風が吹くあい

にくの天気でしたが、最後まで無事にパレードを終えることができました。白川公園に到着したときには、青空も見えて、晴れやかな気持ちにさせてくれました。



この日のための手作り横断幕

次号の掲載予定

- ・ 新年度代表挨拶 など

編集後記

堀口先生はこれまで生徒のために入試制度改革に対応しようと大変尽力して下さったことと、東海の教育そのものがどんな変更にも対応していけるキャパシティを持っていることを、短い時間であれだけの情報をまとめあげた先生の講演自体が証明しているように感じました。自分が男だったら、東海生をうらやましく思うと思います。堀口先生、ありがとうございました!